日中友好のしんぶん
日本と中国

1｜1
2016年第1号　岐阜県版
発行：岐阜県日本中国友好協会
500-8117　岐阜県岐阜市南殿町2－10
TEL / FAX　058-240-0621

新年のご挨拶

岐阜県日本中国友好協会
会長　杉山　幹夫

例年に比べて穏やかな年明けとなりましたが、皆様よい年を迎えられたことと思います。今年は申（さる）年。「申」は草木が伸び、果実が成熟して行く状態を表すといわれ、日中関係もそうあることを願っています。

昨年は戦後70年という節目に当協会は9月に創立60周年を迎えました。この間、日中首脳の会談が開かれ、どのような時でも民間交流の灯を絶やさなかった当協会の活動が報われた思いがしました。

9月の創立60周年式典は、中国側から郭燕駐日公使、葛廣彪駐名古屋総領事、日本側は古田肇知事、衆議院議員の野田聖子、武藤容治両氏、岡崎温日中友好協会理事長の来賓はじめ、総勢120人の参加者と喜びを分かち合うことができました。

特に「民間交流の新たな役割」をテーマとした丹羽宇一郎日中友好協会会長の講演は、駐中国大使や伊藤忠商事会長の経験から内容も豊富で、2017年の日中国交正常化45周年に向けた記念行事の提言は、賛同できる話でした。

本年も民間交流の懸け橋となることを心掛け、活動の輪を広げ、新たな交流の種をまく1年としたいと役員一同張り切っています。会員の皆様の健康と協会の発展を願い、年の初めのあいさつとします。

創立60周年～不戦と友好堅持

当協会は昨年9月5日、創立60周年式典を関係者120人の出席を得て岐阜市の岐阜都ホテルで開き、「不戦と友好の誓い」を堅持し、民間交流の輪を広げる決意を新たにした。

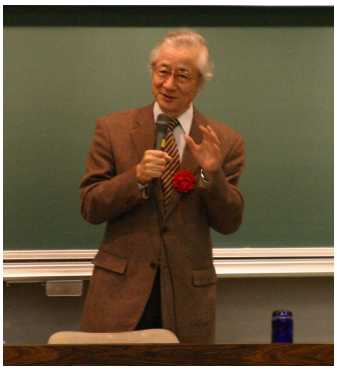
主催者を代表して杉山幹夫会長は戦後の歩みを振り返り、『日中不再戦』の原点を忘れず、民をもって官（政治）を促す」王道を歩むと強調した。

来賓の郭燕駐日中国公使、古田肇知事が「今後も活力あふれる民間交流によって豊かな成果を挙げてほしい」と述べた。岡崎温日中友好協会理事長、葛廣彪駐名古屋中国総領事らも祝いの席に並び、程永華駐日中国大使や中日友好協会、江西省人民対外友好協会、杭州市人民対外友好協会、張澤軍麗江市長、隣県の友好協会などのメッセージや祝電が披露された。

式典に先立つ講演で丹羽宇一郎日中友好協会会長は「日中関係の要は民間の力で政治を動かすこと。2017年の国交正常化45周年位に照準を合わせ、友好都市間で交流イベントを積み重ねよう」と呼びかけた。

加藤千洋氏が講演

中国の二面性見て草の根交流を


一人でも意思さえあれば力になる、と民間交流を強調する加藤千洋さん＝瑞穂市穂積の朝日大学講義室

11月28日、協会創立60周年を記念して、瑞穂市穂積の朝日大学で講演会を開き、同志社大学大学院教授で元朝日新聞編集委員の加藤千洋さんが「大国、中国のジレンマ～その弱みと強み」と題して、中国の習近平政権の素顔を語り、「都市間のパートナーシップの再活性化や個人間の付き合いの積み上げが日中間の悪化した国民感情を解きほぐす」と草の根交流を強調した。

講演会は創立60周年記念行事の締めくくり。講演に先立って杉山幹夫会長があいさつし、「協会の活動は中国人殉難者の遺骨送還から始まった。『日中再び戦わず』の原点を忘れずこれからも民間交流に取り組んでいく」と述べた。

加藤さんは記者時代、北京などに駐在し一連の中国報道でボーン上田記念国際記者賞を受賞。報道ステーションのコメンテーターを務めたこともあり、その柔らかな語りと確かな裏付けによる話で講義室いっぱいの約170人を魅了した。

（講演要旨は裏面へ）

２００８年に当時副主席だった習氏と会った際、厚手のもも引きが足元から見えた。若い頃、下放（都市部の青年を農村で肉体労働によって思想教育）され、陝西省の黄土高原で６年余り過ごした。苦労してここまで上ってきたのだろう。

父親は元副首相の習仲勲という太子党（高級幹部の子弟）でも地方でキャリアを積み、福建省や浙江省では華僑との人脈を培い、ファーストレディ鼓麗媛は国民的歌手と異色の経歴だが、政権交代のとき三つの権力（総書記、中央軍事委員会主席、国家主席）を一手に握り、昨年は国家安全委員会主席（中国版ＮＳＣ）も手にした。オンリーワン体制がこれまでのトップとの違いだ。

「中華民族の偉大な復興」という夢の実現に向けて習政権は２０２０年の国民一人当たりのＧＤＰを２０１０年比の倍増、海洋強国の建設を掲げるが、中進国（中所得国）から先進国になれるかどうか、習氏のかじ取りを注視していく必要がある。省エネ、大気汚染の解消などは容易でないことを政権は気付いており、成長の質を重視している。

強い国家と脆い社会が併存する中国。経済、軍事、政治、スポーツ、頭脳で大国になったが、生態環境の悪化、水不足、経済格差、少子高齢化、民族問題などを抱える。三十年余の一人っ子政策で生産年齢人口が減り出し『未富先老』（国民全体が豊かにならないうちに老い）の時代が来てしまった。２人まで出産を認めると政策を修正したが、簡単に増えるものでもない。

日本の26倍の国土、10倍の人口の中国は国家単位でみると強国だが、足元の社会（きらびやかな高層ビルの下に出稼ぎの人たちの生活など国民一人一人の風景）は矛盾が常態化しており二面性を見ないといけない。

日中間は２０１２年（尖閣諸島の国有化）以来、政治関係の対立が続く。しかし日本は日本社会の強みでもある日常生活の良さ（ソフトウエア）を中国社会の充実化にプレゼントできる。開店休業状態の友好都市交流を再活性化し、個人と個人の付き合いを積み重ねることによって険悪な国民感情を改善できる。一人でも何かできるという意思さえあれば力になる。

先入観持たず自分の目で確認

日中友好大学生訪中団

日中友好協会が昨年、駐日中国大使館と協力して派遣した日中友好大学生訪中団に岐阜県から朝日大学の５人が参加した。団員は全国の大学から推薦、３陣に分かれて毎回１００人余が北京のほかに南京（５月）、西安（10月）、杭州市（12月）を訪れ、地元の大学で学生同士が同世代ならではの交流を体験。５人とも訪中前とは違う、中国に対する印象や思いを深めた。

日中両国の大学生によるグループディスカッション　＝西安外国語大学

早野　莉央（５月参加・３年生）

今回の訪中は非常に貴重な体験でした。客観的に物事を見るきっかけをもらえて自分自身の成長に活かすことができました。また人と話すことによって自分を客観的に見ることができたり、新しい考え方をもらえたりするのでグローバルな関わりをこれからも持ち、自分の可能性を信じて色々なことに挑戦して広い視野を身に付け素敵な人生を送りたいです。

大橋　利紀（５月参加・３年生）

今後の将来を担う私たち学生が今回訪中できたことは、たとえ僅かでも両国にとって有益であり、これからのより良い関係を築く為に意味のある交流であったと思います。そして私自身考えたことが、自分の国を見直し、相手の国のことに関心を持ち少しずつ知っていくことが国と国の関係を築いていく第一歩だと思います。

鈴木　崇大（10月参加・４年生）

実際に中国を訪れてみて初めて、間違っていたことも多々あることに気付かされました。これから多くの人たちに中国の実状を伝え、自ら中国という国を見ることを勧めることが私個人の役割であり、日中関係をより良くする、未来へのバトンであると思いました。

仲本　成望（12月参加・２年生）

日本に帰ってからは、友達や先生に「帰りたくないと思ったほど楽しかったこと」「思っていたことと違ったこと」など私が感じたことを伝えました。訪中団に参加したことがきっかけで私が日中友好の懸け橋の一部にでもなれればいいと思っています。これからも実際に中国へ行って感じたことをたくさんの人に伝えていきたいと思います。

野原　美咲（12月参加・２年生）

今回中国に行ってみて、実際に自分の目で見ることが何より大切だと思いました。日本での報道がどのようなものであれ、先入観を持たずに自分の目で見て感じたものを信じるべきなのだと心からそう思えました。本当に参加できて良かったと思っています。また、この体験や気持ちを他の誰かに伝えたくてたまりません。

（学生の感想より抜粋）